

日蓮聖人の教学形成と法然教学との関連

浅井 円道

はじめに

先に私は「宗祖対法然房」（大崎学報二二八号）、「法然房源空と宗祖日蓮」（法華文化研究三号）の二篇を出して宗祖と法然との教学上の同異を論じたが、この二篇は説明不足のところもあり、また猶、言及すべき重要な問題点を論じ残しているので、ここに更に宗祖と法然との関連を勘えて、宗祖の宗教形成の過程を幾分なりとも明らかにし、以て日頃からの先生の恩義に報いたいと思う。

一、五義と法然

『教機時国鈔』の五義について、はじめに教を置き、次に機・時と次第する順序は、法然の機教相応・不相応の教判に対する批判から生れ出たものではなからうかということは、既に「宗祖対法然房」および「五義判の形成過程の考察」（大崎学報一一八号）でほぼ述べておいたので、此れを参照していただきたい。要するところは、従来の諸宗は皆な教法の浅深を判断して、最も勝れた教理を説くと判定された経論を自宗の依経として自宗を建立したが、法然は之を「理深解微」の一言で否定し、此等を聖道門・難行道・雜行にして末代不相応なりとして捨閉闕抛した。そし

て浄土門・易行道・正行たる念仏を機教相應の行として末代の愚人・悪人に勧めた。それに就て宗祖は、法然は田に種を蒔くべき時は春でなければならぬことは知っていたが、種の良否を選定しなかったから、折角春に種を蒔いたのに、蒔いたのは種でなくて沙（いさご）であったから、収穫の秋がきても実りがないと同じである。故に先ず種の良否を選定し（教法の浅深）、然るのちに蒔くべき時を決めるべきである、というのが宗祖の主張であつて、ここに、さきに教、のちに機・時の順序が成立するに至る素因の一があつたと思われる。然し五義の順序は、宗祖の一代を通観するとき、変化がみられる。なぜ変化したのか、また順序が変化したときどのように意味も変化したか等のことは、今の所論ではない。

因みに、法然には機教相應判ばかりでなく、勝劣判もあるにはある。しかし勝劣判よりも機教相應判を優先し、大事としていたことは、法然自身の言動の中に明瞭に現れているから、宗祖が法然の教判を機教相應判で代表させたことは、法然の意志に随つたまでであつて、宗祖の恣意ではない（「宗祖対法然房」参照のこと）

二、立正安国と法然

立正安国が宗祖の宗教の目的乃至基調であることは周知の宗門的認識であるが、それは第一に立正安国が法華經の仏土観に由来するところだからであるが、同時にまた法然浄土教の持つ宗教体質に対するアンチテーゼでもあるからである。念仏無間を標する以上は、単に南無妙法蓮華經を信じないから謗法だ、墮獄だというばかりではなく、その宗教的体質、宗是が宗祖の理想とするところと全く相容れないからこそ、念仏無間と評しなければならぬ姿勢が生れて来るのであつて、それが立正安国である。

厭離穢土・欣求淨土は源信が『往生要集』の十門中の大文第一に厭離穢土、第二に欣求淨土を標榜して以来の淨土教の信仰の基盤であつて、法然も之を絶対のものとして強力に勧めた。例文を挙げれば

淨土門はまづこの娑婆世界をいとひすてていそぎてかの極樂淨土にむまれて、かのくににして仏道を行ずる也（『往生大要鈔』昭和修法然上人全集四九頁）

今經ハ闍王造逆、韋提厭離穢土欣求淨土ヲ以テ別序ト為シテ之ヲ説リ（『觀無量壽經釈』、同九九頁）

決定往生の人に二人のしなあるべし。一には威儀をそなへ口には念仏を相続し、心には本誓をおおぎて、四威儀のふるまひにつけて通世の相をあらはし、三業の所作出要にそなへたり……かかる上根の後世者は末代にもまれなるべし。二にはほかにたふとくいみじき相をもほどこさず、うちに名利の心もなく、三界をふかくうとみて、いとふ心ろ肝にそみ、淨土をこひねがふ心ろ髓にとほり……往生をねがひて念仏をおこたらず……よそめはとりわき後世者ともしられず、よの中にまぎれて、ただ弥陀の本願にのりてひそかに往生する人あり。これはまことの後世者なるべし（『配流より上洛の後示されける御詞』、同四七八―四八〇頁）

廻向発願心ト申ハ、ワガ所修ノ行ヲ一向ニ廻向シテ、往生ヲネガフココロナリ（『大胡太郎への御返事』、同五一九頁）

スペテイトフベキハ六道生死ノサカヒ、ネガフベキハ淨土菩提ナリ（『要義問答』、同六一三）
と。そしてこの厭離穢土の勧めは、昂じて死を悦ぶ心の勧めとなる。

よはひの日々にかたぶくおば、往生のやうやくちかづくぞとよるこび、命の夜々におとろふるおば、穢土のやうやくとおさかると心ろゑ、命のおはらむ時を生死のおはりとあてがひ、かたちをすてむ時を苦惱のおはりと期し……

とくこの命のはてねかし。こひしきかな極楽。はやくこの命のたへねかし（『配流より上洛の後示されける御詞』、同四七九頁）

・法然聖人の御ことばにいはく、浄土をねがふ行人は病患をえて、ひとへにこれをたのしむとこそおほせられたり（『聖阿上人伝承の御詞』、同七七二）

と、以て浄土宗の厭離穢土の実態がわかる。娑婆を厭い捨てる心と浄土を欣う心とがなければ浄土門の人とはいえない。そして娑婆における一切の行業を廻向して欣求浄土に資せよという。このことの最も強烈な表現は、『禪勝房伝説の詞』の中に「現世をすぐべき様は、念仏の申されん様にすぐべし。念仏のさまたげになりぬべくは、なになりともよろづをいとひすてて、これをとどむべし」（同四六二頁）とある。現世における最重要事はただ念仏のみであり、その他の一切の仏事・善事は結局は念仏の返数の妨げになるとして願みない。これが浄土門に志ある人の生きざまであるという。

成仏を目的とするのが仏教であるのに、成仏はあの世での仕事であると押しつけて、この世ではあの世での幸せを願うだけでよいと勧めることが、果して仏教として許されるのであろうか。この世での生きざまは、念仏しやすいうに生きれば、それで充分であると教えることが、宗教の人類に対する役割といえるであらうか。早く浄土に往生したいと願う心は、やがて臨終を悦び迎える心を生み出す効用があるかも知れない。しかし人の心は複雑である。自分の人生を浄土の仏意に沿うべく、力一杯、悔いなく生きることを怠っておいて、果して従容として死に就くことができるのであろうか。こういう疑問が法華経に生きた宗祖の心に醇勃として湧きおこったであらうことは、想像に余りあるものがある。

宗祖の法然浄土教批判の初期のものに正元元年の『念仏者追放宣状事』、同年の『守護国家論』がある。前書には、初めこの勅文を注した理由を述べるが、その中に「源空法師トイフ者アリ……常ニ四衆ヲ誘フテ云ク、浄土三部ノ外ハ衆経ヲ棄置スベシ、称名一行ノ外ハ余行ヲ廢退スベシ。矧ヤ神祇冥道ノ恭敬ニ於テヲ哉、況ヤ孝養報恩ノ事善ニ於テヲ哉。之ヲ信ゼザル者ハ本願ヲ疑フ也ト……日蓮不肖ナリト雖モ且ツハ天下ノ安寧ヲ思フガ為ニ、且ツハ仏法ノ繁昌ヲ致サンガ為ニ」（定遺二二五八）念仏者追放の宣旨御教書を集めたという。祖先崇拜を廢し、孝養報恩の道をふさぐ法は「天下の安寧」を乱すものであるとの趣旨である。後書は『選択集』批判の専門書で、批判の仕方は学問的であるから、日頃の鬱憤を吐露する情趣には乏しいが、大文第六の「行者用心」を示す中に「法華経修行ノ者ハ何レノ浄土ヲ期スベキヤ」と問い、答うるに「本地久成ノ円仏ハ此世界ニ在セリ。此土ヲ捨テテ何レノ土ヲ願フベキヤ」として我常在此娑婆世界等の寿量品文、即是道場の神力品文を挙げて、欣求浄土に反対し、題名に守護国家というところに、法然の厭離穢土の宗教姿勢に対する批判が認められる。

翌年には『立正安国論』を前執権北条時頼に上呈された。ここで守護国家は立正安国と改名され、以後永く立正安国の名が宗門に定着して現在に至っているが、何故に守護国家よりも立正安国の方を宗祖は常用されたかも考えてみる必要がある。私考するに、守護国家は最澄にも『守護国界章』があったように、旧仏教の鎮護国家にまぎれやすい。最澄の場合は、最終的には国宝的人材の養成が即ち守護国界であったが、仏教一般では護国の經典を長転長講し、あるいは国家安泰を祈禱することを以て鎮護国家の法とした。その祈りには庶民の平安も含まれていたであろうが、主たる関心は天皇を頂点とする貴族社会、又は一門閥のいやさかえであったろう。宗祖の立正安国は正嘉の大地震に塗炭の苦渋をなめている鎌倉庶民の現実を直視して『立正安国論』作成を決意したと御自身述べておられるように、

「国土ノ恩ヲ報ゼンガ為」「國ノ為、法ノ為、人ノ為」（『御勸由来』、同四二二・四二四）、つまり國中の庶民の爲であった。何よりも法然の厭離穢土に対する否定であるから、此土の仏土化を念願とするものであり、淨仏国土という菩薩の誓願を満足するためのものであるところに、旧来との相違がある。

『安国論』は十番の問答からなり、前八番は災難興起の由来と災難退治の方法、および自叛他逼の二難の予言とかならなるから、破邪であり、序分である。第十番は流通分であるから、結局、正宗分たる顯正の場面は第九番問答の中の「汝早く信仰ノ寸心ヲ改メテ速カニ実乗ノ一善ニ帰セヨ。然レバ則チ三界ハ皆仏国也、仏国其レ衰ヘン哉。十方ハ悉ク宝土也、宝土何ゾ壞レン哉。國ニ衰微ナク土ニ破壊ナクンバ、身ハ是レ安全ニシテ心ハ是レ禪定ナラン。此ノ詞、此ノ言、信ズベク崇ムベシ」（同二二六）の六十四文字にすぎない。立正すればどうして安国となるのか。安国は果して実現可能なのだろうか。正法とはどんな法で、それを信すれば凡夫にどんな精神改善が齎されるのか等の説明は一切ない。しかし「此ノ詞、此ノ言、信ズベク崇ムベシ」の九文字は非常に意味深長だと思ふ。安国の実現ということとは、今も昔も心から信じ切れる人は皆無といつてよい。だから昔においては法然は此土にこの末法に淨土を建設することを断念して、西方極楽への移住を提唱した。現代でも、世界平和は皆が切望するところであるが、本当に可能か、乃至は自分が実現してみせることができるかと問われれば、人に煩惱がある限りは不可能ではないか、殊に国家間の利害関係となると欲望むき出しになる。しかし宗祖は之を信崇せよといわれる。なぜ信崇することができるか、乃至は信崇しなければならぬかというところ、安国の実現は必然であるということとは法華經の金言だからである。寿量品に「衆生劫尽キテ大火ニ焼カルト見ル時モ我が此ノ土ハ安穩ニシテ天人常ニ充滿ス」とある。仏眼に映じた娑婆世界が淨土である理由は、娑婆世界は「我常在此娑婆世界」、釈尊の本土、本国土妙だからである。元來が本国土で

ある以上は、娑婆がいかにも厚く凡夫の悪業に蔽われていようと、必ずやその本来性が顕現する時が来るはずである。しかし娑婆の本来性を取りもどす人は末代の悪人・愚人であって、そういう難行に堪え得るほどの能力はないと考えたのは法然であって、法華經によれば、凡夫も衣裏宝珠の人であり、たとひ三五下種の者は末法には皆無になるとしても、近世得脱・今日得脱の者が地涌の菩薩（『文句』一）として出現し、本未有善の凡夫の衣裏に新たに宝珠を縫いつけるのであるから、末代の凡夫を貧人として輕視してはならない。とことんまで微力な凡夫の有する可動力を信賴し抜く、これが法華經の精神であるから、宗祖も『本尊抄』に「今本時ノ娑婆世界ハ三災ヲ離レ四劫ヲ出タル常住ノ淨土ナリ」とて、娑婆こそ本國土であると訓誡され、また「一念三千ヲ識ラザル者ニハ仏、大慈悲ヲ起シ、五字ノ内ニ此ノ珠ヲ包ミ、末代幼稚ノ頸ニ懸サシメタマフ」とて末代凡夫の衣裏に宝珠を懸けることを慈悲とし、念願された。本時の娑婆世界は淨土なればこそ、立正安國を信崇せよと云われたのである。

三、報恩と法然

ところが常識的・日常的な考え方から見ると、ただ南無妙法蓮華經を但信口唱するだけでは立正安國は実現しない。早い話が、口では南無妙法蓮華經と折々は唱える人の中にも、人の損傷を屁とも思わないであくどい商売をしている人もいるし、隣の同寺同檀の人が食うや食わずでいるのに、輕蔑こそすれ、時には食を分け与えてあげようともしない人々が現に眼前に在る。そこで宗祖は『開目抄』には「佛法を学せん人、知恩報恩なかるべしや、仏弟子は必ず四恩をわすれて知恩報恩ほうずべし」（同五四四）、『報恩抄』には「仏教をならはん者、父母・師匠・國恩をわするべしや」（同二一九二）と、知恩報恩の大切なことを常に懇々と教誡される。御自から之を躬行し、他にも行わし

められたことは周知のところである。苟しくも南無妙法蓮華經と唱えるほどの人は、報恩の大切さを知り、報恩の志がなければならぬのである。恩を以て人間関係を結べば、安国は必ずや実現する。報恩は安国のための不可欠の要件なのである。また立正安国の宗教だからこそ報恩を人生の大事として大切にしなければならないのである。

ところが法然は厭離穢土の宗教であるから、穢土での凡夫の行動は所詮は悪あがきにすぎない、どんな善根も往生に資するほどの大善ではない、かえって往生の正定業を修する妨げになるとして、報恩を捨てしめる。例えば『選択集』の「釈尊、定散諸行ヲ付嘱セズ、唯念仏ヲ以テ阿難ニ付嘱スル文」の中に

観無量寿經ニ云ク、仏、阿難ニ告ゲタマハク、汝好ク是ノ語ヲ持テ、是ノ語ヲ持テトハ即チ是レ無量寿仏ノ名ヲ持テトナリ。

同經ノ疏ニ云ク、仏告阿難汝好持是語ヨリ以下ハ正シク弥陀名号ヲ付屬シテ遐代ニ流通スルコトヲ明ス。上来、定散両門ノ益ヲ説クト雖モ、仏ノ本願ニ望ムレバ意ハ衆生ヲシテ一向ニ専ラ弥陀仏ノ名ニ在リ。

私ニ云ク……初ニ定善ニ付テ其ノ十三有リ。一ニハ日想観、二ニハ水想観……。次ニ散善ニ付テ二有リ。一ニハ三福、二ニハ九品。初ニ三福トハ經ニ曰ク、一ニハ孝養父母奉事師長、慈心ニシテ殺サズ、十善業ヲ修ス。二ニハ受持三帰具足衆戒不犯威儀。三ニハ菩提心ヲ発シ、深ク因果ヲ信ジ、大乘ヲ誦誦シ、行者ヲ勸進ス……。応ニ知ルベシ、釈尊、諸行ヲ付屬シタマハザル所以ハ、即チ是レ弥陀ノ本願ニ非ザルガ故也……故ニ知ヌ、諸行ハ非機失時、念仏往生ハ当機得時（法全三三八―三四四）

と。類文は甚だ多い。三福は弥陀の本願の行ではない。諸行であり、「諸行ト雜行ト、コトバハコトニ、ココロハオナジ」（同六三三、六九七等）であり、末代には非機失時として捨てられる。かくて三福の第一である孝養父母・奉

事師長は雜行として捨て去られねばならぬというのが法然教學の原則であるが、法然の教えに従って強ちに捨て去ることもならぬ事情の者も門徒の中には居たわけで、例えば『熊谷の入道へつかはす御返事』に「けうやうの行も仏の本願にあらず、たへんにしたかひて、つとめさせおへしますへ候……八十九にておはしまし候なり。あひかまへてことしなんとをは、まちまいらせさせ、おはしませかしとおほへ候」(同五三五―六)と説く。前半には、孝養は本願の行ではないから、ほどほどにして、念仏に専念することこそ大切だという意向が見え、後半には、八十九の母親(?)に対しては、今年のお迎えを心待ちにしていなさいと云ってあげるのが最も適当な孝養であるとの意が見える。

法然が報恩の道を閉ざしたことについては、宗祖は『念仏者追放宣状事』の序の中で既に「称名一行ノ外ハ余行ヲ廃退スベシ、矧ヤ神祇冥道ノ恭敬ニ於テヲ哉、況ヤ孝養報恩ノ事善ニ於テヲ哉」(定遺二二五八)と云って憚らぬ念仏宗を亡国の邪法として指弾しておられ、報恩無視ということを念仏無間の理由の一とされたことがわかる。現代は報恩を軽視する人は多いが、真向から否定する人は少ない。否定するほどの人は余程の偏頗な思想の持ち主である。ところが法然は欣求浄土のための念仏専修を徹底するために、報恩という人倫の道をさへ否定した。故に逆に立正安国の宗是の徹底のため、報恩の重要性をいよいよ強く我々は認識すべきか。